



研究代表者
西本 清一
京都高度技術研究所理事長
京都市産業技術研究所理事長
京大名誉教授

「日本文化創出を考える」研究会

平成30年度けいはんな学研都市・文化力協力推進事業（京都府）

関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）は、そもそも学術や科学技術の研究のみをその使命とするのではなく、古には都として文化の中心であったこの地域に相応しい「日本古来の伝統文化」と「先端科学技術」の融合からなる新たな「文化活用力」を生み出していくことが求められている。それを実現するため、「文化」を都市名に冠する本地域において、日本文化は何かという視点での思想的な探求と、その活用のあり方を研究する。

参加研究者

氏名	所属・役職
西本 清一	京都高度技術研究所理事長、京都市産業技術研究所理事長、京大名誉教授
内田 由紀子	京都大学こころの未来研究センター教授
熊谷 誠慈	京都大学こころの未来研究センター特定准教授
高橋 義人	平安女学院大学特任教授、京大名誉教授
徳丸 吉彦	聖徳大学教授、お茶の水女子大学名誉教授
長尾 真	国際高等研究所学術参与、京大名誉教授

研究目的と方法

京都はしばしば文化首都と呼ばれ、外から持ってきた材料を最も適した比率で調合し、優れた工芸品に仕上げる高度な技術が蓄積されてきた。京都で培われた伝統工芸の伝統は形を変えて今日にいたるまで引き継がれ、「京都ブランド」とも呼ばれる京都独自の輝かしい産業が発展してきた。

これから50年、200年先のことを考えると、進歩史観とは異なる歴史観や世界観を持たざるを得ない。文化を顕在化しないまま経済的な繁栄を求めてきたところに、文化に目を向ける一つの大きなチャンスがある。戦後の経済発展を通して置き去りにされた文化に価値を見出す時代の表現のためにどのような施策が必要か、以下の視点からまとめる。

- ①「日本文化とは何か」という視点を中心に置き、様々な分野の専門家によって多角的な分析を行うことを通じて、「日本らしい」と言われるものが何故そうであるのかといった背景に至るまで、日本文化を思想的に探究し、更にはその活用のあり方を模索する。
- ②過去からの文化や技術と断絶し、最新の技術だけをベースに構想するのではなく、伝統的技術や技の活かし方、デザインの活用など、伝統と先端科学との融合を前提に構想する力を掘り起こす。
- ③けいはんな学研都市の産学公民の各ステークホルダーに問いかけたテーマを設定し、参加者との対話を通して文化活用力の強化のあり方について議論する。

④けいはんな学研都市立地企業等との文化力に係る共同研究可能なテーマを吸収し、将来的には実証実験等の実施や事業化に資するよう、より実践的な活用がなされる活動を組み入れる。

2018年度実績報告

2025年に開催される大阪・関西万博（以下、「万博」）に対して本研究会としてどのような貢献ができるかという視点で見ると、万博では持続可能な経済、社会システムを構築していくことが謳われている。また、万博の多彩な魅力として、悠久の歴史、文化を誇る大阪・関西が異文化との交流を通じてさらに豊かなものとなり、世界における圏域の認知度が向上する、日本の様々な分野における次世代の若いクリエイターが自らの才能を世界に向けて発信できるということも標榜されている。けいはんな学研都市を中核に京都地域から世界に発信していけるものが多々あるという視点の下、けいはんな学研都市をコアに同心円を描いた京阪奈エリアに入ってくる奈良も、京都も、大阪も、伝統的な文化と、今から50年ぐらい経たないと文化にならない萌芽的なアイテムをも視野に入れ、けいはんな学研都市で何ができるかを検討した結果、けいはんな学研都市に深いかかりを持つ日本文化の代表的なアイテムとして、今年度は「竹」に着目した議論が繰り広げられた。そして、けいはんな学研都市と京都府が一丸となり、長期的な視点で段階を踏みつつ、文化が凝縮された取り組みをけいはんな学研都市という一つの象徴的なエリアで進める視点から、以下のとおり報告書ととりまとめた。

第1章：世界の竹資源と文化

- ・竹の分布の中心は東南アジアと中南米にあり、温湿熱帯のアフリカにも部分的に分布しており、日本の竹は世界の北端に位置している。
- ・日本の竹は、温帯性の竹と表現され、温帯地域に適応するために進化した結果、熱帯の竹とは全く異なるスタイルの竹になっている。
- ・竹は、24時間当たりの伸長量が世界最大の植物として認められており、英国自然史博物館でも紹介されている。
- ・管理されている竹林は、地下茎のネットワークがしっかり構築されるため、防災機能を備えた空間として評価されてきた。
- ・地球温暖化対策上、竹林は二酸化炭素吸収源として高い価値を持っているとの指摘があり、この観点から塗上国で非常に注目されている。

第2章：竹と日本文化

- ・レヴィストロースは、ヨーロッパにとって日本の発見はアメリカ大陸の

発見に次ぐ第二の大発見であると指摘し、拡散した東西の両端で最初の文明を独自の形で深め洗練させたのが日本文化と西洋文化なのだ、という仮説を立てている。京都は日本の竹文化を創出してきた代表的存在であり、京都から竹文化の意義を世界に発信していきたい。

- ・日本人が竹を好むのは、自然の形態で用いる白木（素木）の美学に通じており、竹は白木の柱と同じようにすべすべして、木の節がない。しかも白木が樹木の樹皮を剥いだものであるのに対して、竹にはもともと樹皮がなく、そのまま「純粋な自然性」を体現している。
- ・竹は古代から日本の精神性や精神文化に大きな影響を与えてきており、縄文時代の遺跡から竹製の籬や櫓などが出土し、縄文時代には竹製品が存在していたことが分かっている。

第3章：日本における竹林の活用と課題

- ・竹細工は無名の職人が作る民衆の日用品の美「用の美」に繋がる代表的な伝統工芸の一分野を成し、目で楽しみ使って愉しむ身近な多数の美術品を生み出してきており、日本文化として定着している。
- ・茶室建築には竹が多用されているほか、茶道具にも竹が使われ、典型的な竹文化を形成している。
- ・伝統工芸だけでなく、建築用資材、プラスチック代替品、造園資材、食用など、竹の応用分野は非常に広い。

第4章：サイエンスの視点で竹文化を整理しなおす

- ・京都が蓄積している伝統工芸や美術など、多様で素晴らしい文化資産をデータベース化し、誰もがそれにアクセスし使えるようにすることによって、社会に浸透、定着させていく必要がある。
- ・未来社会への応用を考える際、竹の成長に見られる爆発力をサイエンスの視点から検証する意義は非常に大きい。
- ・情報化が爆発的に進んでおり、いずれはシンギュラリティ（特異点）が起こるとの指摘もあるが、竹の特異な成長特性と重ね合わせていけば、未来予測に繋がるかもしれない。

- ・竹には特殊な精神性を感じさせる要素があり、小説のなかに登場する竹は精神文化との何らかの関わりを示している可能性がある。そういう視点で、竹と人間の精神性について議論する、半ば哲学で半ば小説のような議論も考えられるだろう。

第5章：日本文化創出の機会になる大阪・関西万博

- ・万博開催の機会を捉え、2019年4月から5年間かけて、研究会における議論や国際シンポジウムの開催を通して、けいはんな学研都市で竹文化が凝縮された文化基盤を構築していく。
- ・毎年一つのテーマを設定して進めるとした場合、5年間かけて五つのテーマを研究していく研究会に加えて、展示会、演奏会、国際会議を随時開催するなど、万博に向けた取組を具体的にしていって5年計画を構想する。
- ・2018年度は、音楽、ファッション、観光、シンポジウム、ポップカルチャーとの融合に関するイベント案を議論した。



今後の計画・期待される効果

研究会の成果の活用の方向性として、「日本文化を基盤とした新たなモノ・サービスの創出」につながる何らかの成果をここから発信していくことに置く。この目的を達成するには二つの視点が大切である。一つは「将来の斬新なコンセプトが日本文化を基盤として提示できる」こと、もう一つは「過去から蓄積された日本文化の資産としての活用方法がここから示される」ことである。2025年に開催が決定した関西万博に、悠久の歴史や文化を基盤にしつつ、持続可能な社会や経済システムの在り方を提案したい。

そのために、けいはんな学研都市を中核とする京都地域、具体的には京都市内から京都イノベーションベルトを経てけいはんな学研都市に繋がる南北軸、ならびに舞鶴港から京都縦貫道・京奈和自動車道を経てけいはんな学研都市に繋がる北西軸を含めたオール京都地域から、世界に発信すべき日本文化の新創出と産業応用の形を明らかにする。

近年、日本に対する世界の評価は「ジャパン・アズ・ナンバールワン」から「クールジャパン」へと潮流が変遷してきた。次の時代は「心の時代」となるであろう。デリケートな人間性に焦点が当たっていく時代の中で、京都が育んできた魅力ある文化をどのように位置づけ、どのようなキャッチフレーズで打ち出していくべきかということも議論して、文化のみならず産業のコアになるような取り組みも考えなければならぬ。その結果、万博の場において、本研究会として「先端的学術文化芸術都市宣言」を打ち出すことを目指したい。